

「ラム」：吉田公平先生

(東洋大学名誉教授)

西晋一郎の中江藤樹論



西晋一郎が中江藤樹については、管見の限りでは、『藤樹先生の学徳』（昭和六年。渾沌社

出版部）に収める「藤樹の学徳」「報本反始」、『東洋道德研究』（昭和十五年。岩波書店）第五章「中江藤樹の学」などにおいてまとまった言説を残している。しかるに西晋一郎が中江藤樹論を開示する際に用いた論理構成の特色は「即」の論理である。西田幾多郎なども「一即多」などと、「即」の論理が多用されている。しかし、なぜそのように「即」の論理が持ち出されているのかが分かりにくい。そのために西晋一郎・西田幾多郎の論旨がわかりにくい。一つの理解の仕方としては、朱子学がいう理一分殊論（本体としての普遍的「一者」が現象界に作用すると個別者として顕現すること）が参考になる。この理一分殊論は陽明学では渾然一体論という表現をとる。朱子学では本体とは未だ発動していない静態を

いい、作用とは未発の静態が発動した已発の動態をいう。未発の本体と已発の動態は繋がりを持つものの、

本体と作用ははつきりと静と動とに区別される。陽明学の「即一」論は本体と作用は繋がりがあつたことはもちろんのこと、働きの流れにおいても、已発の作用は未発の本体が発動したものであるから、未発・已発は渾然一体であり、両者は切り離せない。朱子学と陽明学の違いを如実に示すものである。人間の實在（心）と本質（性）をめぐる立論である。朱子学・陽明学などはこの心性論をめぐって賑やかに論議した。何故か。「救われるか否か」が係つていたからである。彼らは人間の本性は生得的に完全に善であるという性善説を信奉した。その本性が順調に發揮すれば悪の世界に陥ることはあり得ない。つまりは悪から救われる。本性を順調に發揮させるにはどうすればよいのか。まず第一には本性が善であることをしっかりと覚悟すること。この覚悟を体認ともいう。第二には、本性が順調に発動するのを阻害する要因（私欲・我欲）に打ち克つ努力をすること。このことを「工夫する」という。他力（救済する神など）に依存すること無く、あくまで自力を基本とするいわゆる自力救済論であ

る。中江藤樹の心性論も基本的には自力救済論である。

さて西晋一郎は中江藤樹の心性論については、殊更に深入りして開示していない。西晋一郎の「即一」論が展開されているのは、本体と作用の關係論の分野ではない。そうではなくして、作用論の分野においてである。「親に孝」とは、即「君に忠」であり、即「天皇に忠」であるとか、「郷土愛」は即「國家愛」であるとか。次元を異にする作用を「即一」の論理で縦横無尽に展開される。なぜこのような立論になるのであろうか。西晋一郎の思想、中江藤樹理解を解析する鍵である。なかなか一筋縄では把握できない。西晋一郎の心性論を理解するためには『中庸解・續解・通釈』を理解する事が肝心なのだが、これが難儀である。改めて考えてみたい。



ひじりの声 上田 藤市郎

藤樹書院の正面左側に「致良知」と書かれた扁額がある。江戸時代の書院の玄関に掲げられていたもので、明治の書院焼失の際に、上小川の人々が取り外してくださったお陰で現存していると聞いている。この「致良知」の書体には、特徴があり、すべての文字の先端が蔓のように湾曲しており、一説に、「烏虫篆」という篆書のひとつであると知人から教わった。虫というイメージから蚯蚓（ミミズ）の動きを模したのかと思つたが、そうではなくて、和紙などを食う紙魚（シミ）が和紙を蝕んだ痕がくねくね曲がつている形から発案された書体だという。中国では学問所、書院などの門柱や扁額にこの書体が掲げられているそうで、ここからは、小生の推測であるが、紙魚に親しむ人々とは、常々、書物を身近に置き、読書、学問に没頭する人々、文武の文にこそ重きをおく人々を指しているのではないかということである。孔子さまの文治政治の象徴ともいえるのである。

藤樹先生は、中国の書物を通じて朱子学、陽明学を究明された。先生が、どの文献からこの書体に関心をもたれたかは定かではないが、先生の祖父の神輿にもこの書体が彫られていることから、学問一筋の先生の心意気が伝わってくる。